2023年1月24日　山陰中央新報　許可を得て転載しています

中央新報　（第3種郵便物認可）

島根大開発の手術機器

難治性緑内障に効果

特殊レーザーで眼圧低下

島根大医学部付属病院（出雲市塩冶町）が23日、緑内障治療の新たな手術機器が効果を上げていると発表した。特殊なレーザーを眼内組織に当て、治りにくい原因となる高い眼圧を下げる機器で、2022年7月に国内で初導入。これまで手術した患者6人全員に効果がみられたという。（黒沢悠太）

共同開発した装置の説明をする谷戸正樹教授＝出雲市塩冶町、島根大医学部付属病院

緑内障は、老化や近視で目と脳をつなぐ視神経が萎縮して視野が狭まり、重症化すると失明に至る眼病。失明原因としては国内で最も多いとされる。治療は点眼や、手術で眼球内の液体「房水」を排出して、視神経の負担となる眼圧を下げ進行を遅らせるのが一般的だが、完治せず、まれに手術を複数回しても効果がない場合もある。

今回開発した機器は内視鏡にレーザーを組み込んだカテーテルで、眼球内で房水を作る組織「毛様体」にレーザーを当てて焼き、房水の量を減らして眼圧を下げる。手術時は局所麻酔をかけ30分程度で終了する。

島根大は2014年に医療機器製造のファイバーテック（千葉県）と共同開発に乗り出し、2016年に完成。22年に医療機器として承認され、使用するようになった。

導入以降、10代～80代の患者6人に手術し、全ての患者の眼圧が低下。重い合併症の発症事例もなかったという。開発と手術に携わった眼科学講座の谷戸正樹教授(51)は「高度な技術も必要なく手術できる。ぜひ普及してほしい」と話した。